Section editor **前野哲博**（筑波大学臨床医学系（卒後臨床研修部））

パリ・アメリカンホスピタルでのプライマリ・ケア実習記

レポーター：**大塚　亮平**
聖マリアンナ医科大学　６年

私は５年生になる春休みを利用して１ヶ月間パリにあるパリ・アメリカン病院でプライマリ・ケア短期研修を行ってきました．

研修プログラムの概要

私が参加したこのプログラムはパリ・アメリカンホスピタルで開業している岡田正人先生がボランティアで学生を受け入れ，アメリカ式のプライマリ・ケアの教育をマンツーマンで行っているものです．指導してくださった岡田先生はアメリカの内科専門医，アレルギー・臨床免疫専門医，膠原病・関節内科専門医の資格を持っていらしてエール大学等で研修医の教育スタッフや臨床医・研究医として活躍されていた先生です．現在はパリ・アメリカン病院の日本セクションで日本人のためのプライマリ・ケアを行っています．

パリ・アメリカン病院はパリの郊外に位置する国際総合病院で，ヨーロッパ内はもとよりアフリカ，西アジアからも多くの患者が訪れます．病院内にあるおしゃれなカフェテリアや中庭は，患者さんだけでなく日々の診療で疲れた医師をも癒してくれます．

患者の満足度〈診療に対する姿勢〉

私はこの病院の日本セクションの外来で研修させていただいたわけですが，この外来は予約制で患者さん１人につき診療に30分の枠をとっており，一日の患者さんは20人くらいです．患者さんの層は若く，病気はほとんどがコモンディジーズで，残りがリウマチ・膠原病関係です．この実習で感銘を受けたのは，患者さんに常に良い医療を提供しようという岡田先生の姿勢です．ある患者さんは「日本ではこのような医療を受けたことがない」といって満足していました．先生は薬や予防接種ひとつをとっても効果や起こりうる副作用とその頻度など患者さんが納得して治療を受けられるように説明します．頭から足までという丁寧な全身の身体診察も，同様に患者さんの満足度を高めているようでした．患者さんには携帯電話の番号を教え，何か困った時や検査の結果について聞きたい時などいつでも連絡が取れるようにしています．実際に一日に何度も患者さんから電話が来ていましたが，先生はいやな顔ひとつせず丁寧に答えていました．

習うより慣れろ〈最初は何もできない〉

私自身今まで２，３回の病院見学だけで，臨床実習の経験はありませんでした．もちろん最初は何もできませんでしたし，知識もありませんでした．最初の週は先生のやっていることを見て，特

徴的な所見を一緒に見せてもらうことだけで精一杯でした．２週目頃から先生の診察後に時々「身体所見をとって」とか「血圧を測って」といわれ，最初はわけもわからず緊張しながら患者さんを診察していました．自分の測った血圧や行った診察の結果が患者さんの本物のカルテに書かれると思うと，とても責任を感じます．責任を負うことで勉強しようとするモチベーションが上がり，時間があると自然に教科書をめくっていました．

問診って大切?!

３週目からは同意を得た患者さんに最初から一人で問診・診察をさせていただきました．

実際に問診をしてみると思っていた以上に難しいと感じました．特にここはプライマリ・ケアの外来ですので軽い病気も重い病気も，身体的なものも精神的なものも診ます．その上臓器も特定されていません．いかに問診でポイントをおさえて聞けるかによってその後の診断・治療が大きく異なります．患者さんへの質問ひとつとっても，その裏には理由があり，疾患や病態生理をしっかり理解していないと必要なことが聞けないということをこの貴重な経験を通して勉強させていただきました．私は今まで問診というのは医師に話をきいてもらうという患者さんの満足度の比重が高いと思っていましたが，それと共に，病気の診断，治療で非常に大きな意味を持つことを身をもって体験させていただきました．

教育に対する姿勢

先生は忙しい診療の合間にも「何か質問はある？」と声をかけてくださり，学生の私に質問しやすい雰囲気を作ってくださいました．たとえ同じことでもわかるまで何度も丁寧に教えてくださり，とても感謝しています．先生は「教えることが一番の勉強であり，それによって自分の知識を維持したり，新たなことを学んだりできる．」という謙虚な姿勢で教育してくださり，時には私と一緒に教科書を見たり，文献を探したりしてくださいました．

医学教育は非常に忍耐のいるものであり，かつ周囲からの評価が得られにくい部分でもありますが，そのような中で学生に対して思いやりと熱意をもって指導していただけたことを大変うれしく思います．

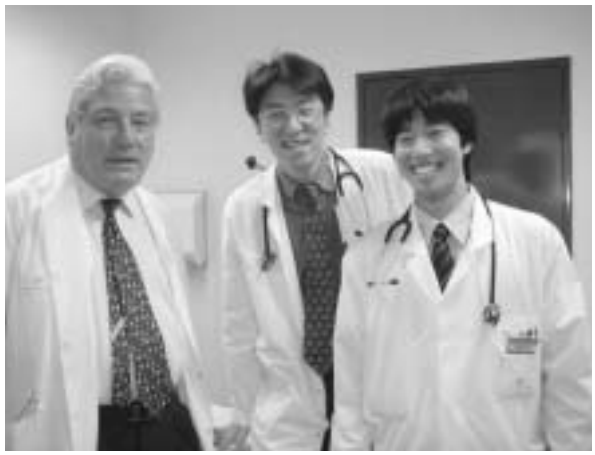
インターネットがあれば世界中どこでも…

岡田先生の診療は色々なことを気付かせてくれました．診療におけるインターネットの有用性もその一つです．先生の外来ではインターネットや様々な雑誌を診療に利用していました．New England Journal of Medicine や UpToDate，それに JAMA，Lancet 等から得られる情報によって信頼性のある検査や治療を行っています．それが結果として患者さんや他のドクター，医療従事者からの信頼につながっているのです．大学病院だから最新の治療をやっているとか，一番正しい治療法を行っているというわけではなく，個人の医師の日々の努力によっていくらでも最高の医療を提供できると思いました．つまりインターネットのような媒体をうまく活用すれば，世界中どこにいても，同じ情報を手に入れることができ，都会から離れた田舎でも，発展途上国の病院にいても最新の根拠に基づいた知識の元で良い診療ができる可能性があるのです．

ロールモデルに出会って
〈ロールモデルがいかに大切か！〉

指導してくださった岡田先生は患者さんに対する姿勢や配慮，医学知識，スキル，どれをとっても私の見本となりました．このような自分のロールモデルの先生の下での研修は教わることが多く毎日がとても充実していて勉強する意欲も湧いてきました．実習の合間に先生がどのように今まで勉強してきたかを聞き，それを実践してみたり，あるいは先生と話をすることで医師という職業や将来のことを深く考えたりしました．パリにくる前は休日に勉強するとは思ってもいませんでしたが，先生のように患者さんに良い医療を提供できるようになりたいという思いから，気がつくと休

パリ・アメリカンホスピタルの外観



お世話になった先生方と
（左より外科医のDr. Relland，岡田正人先生，筆者）

日も机に向かっていました．

今，医学教育において様々なディスカッションがされています．よく言われることですが，医学教育で大切なことは教育を提供する側とその受け手との関係です．理想的なことを言えば，教育者が学生のロールモデルになることです．ある大学では〝We are role models.〟と教員が合言葉のように言っていると聞いたことがあります．また，アメリカの医学部ではロールモデルとなる医師をできるだけ学生の近くに置き，学生を感化するように工夫しているそうです．学生への一番の効果的な教育は学生に強制的に勉強をさせることでも，学生の知識の無さを叱ることでもなく，自分自身が手本（ロールモデル）になって学生を感化することであると強く思いました．この研修に参加してみて，ロールモデルを持つことがいかに大切であるかがわかりました．

最後に，研修で大変お世話になった岡田正人先生，パリ・アメリカンホスピタル日本セクションの皆さんに心から感謝いたします．またこのような体験をすることができたのも聖マリアンナ医大の先生方から沢山の貴重な機会をいただきご指導を賜ったおかげです．この場を借りて御礼申し上げます．

連絡先：大塚　亮平
E-mail：h10013@marianna-u.ac.jp